

二次元ドリームノベルズ

18
未満



サンダークラップス!

THUNDER CLAPSI REBORN

マイティナース

羽沢向一
挿絵：緑木邑

Contents

第一章
マイティナース
誕生 004

第二章
はじめての
ヴィランとの闘い
028

第三章
黄金に輝く
処女陵辱
047

第四章
古き蛇の轟く
淫魔術 090

第五章
ヒーローたちよ、
イキ狂って
産卵せよ！
120

エピソード1
真相 171

エピソード2
真実 178



スターサンダー

Star thunder

「サンダークラス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血の
ミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。

マイティナース

Mighty nurse

清楚な雰囲気の子大生。近しい人外種以外に
は自らがオフビートであることは隠している。
スーパーヒーローに憧るつもりもなかったが、
能力を使って人助けをしたことをきっかけ
に「マイティナース」として活動を始めます。



ローズデバイス

Rose device

「サンダークラス」の一員。清楚可憐で
色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷
を負い、体内にナノマシンを入れている。
様々な機能を持つアーマーを装着して闘う。



フレア

Flare

スーパーヒーローチーム
「サンダークラス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオー
ターに創られた人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。



オセロット

Ocelot

「サンダークラス」の一員。猫科
の猛獣の雰囲気を持つ陽気な美女。
南米の自然の精霊たちと認められた
シャーマンで、精霊の力を宿してジャ
ガーの獣人に変身して魔法を使う。



REPTILEHOLE

レプティルホール
Reptilehole

爬虫類をモチーフとする
犯罪組織。

サンダークラス! リターン
CHARACTERS マイティナース









目次

- 第一章 マイティナース誕生
- 第二章 はじめてのハイランとの闘い
- 第三章 黄金の輝く少女の謎
- 第四章 古神の舞の秘儀
- 第五章 ヒーローたちよ、イキ狂って奮闘せよ！
- エピローグ一 真相
- エピローグ二 真実

オフビート。

それは世界中にいる超人たちの総称。

かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンD.C.へ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が生身で受け止め、生身を宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、宇宙からもたらしてくる。集まった記者たちへほろからかいて、僕は子供のころから『超子』と呼ばれていた。と語った。

それからスーパーオフビートは輝やかな赤いコスチュームをまとい、赤いクレープをひるがえして、倒れかかったビルを持ち上げ、墜落する飛行機を支え、海面に沈んだ潜水艇を引き上げた。

さらに多数の犯罪者と闘い、ギャングが放った銃弾の雨も砲弾も網で跳ね返し、テロリストが仕掛けた猛火にも冷静にも耐えて、悪魔を逮捕して法の裁きのもとへ送った。

最初に世に現れた超人スーパーオフビートに刺殺されたのが、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。彼らは生身ではない超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは意志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物。はては異星人に別次元人までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフビートと呼んだ。

オフビートたちの多くの者が、特別な能力を大小様々な犯罪に悪用した。別のオフビートたちは、始祖スーパーオフビートにならって、犯罪と闘い、事故から人々を助け、天災から人々を救うスーパーヒーローとして活躍している。

しかし大多数のオフビートたちは、豪華や近しい人々だけに自分の超能力を明かして、ごく普通の人間として生活している。
「オールドマン」

今度流奈も新しい平凡なオフビートのつもりだ。

流奈はメンションの自らの壁にある壁に、自分の全身を映した。
十八歳、大卒二年生、身長は一六七センチ。

色白の肌に加齢は、どこか昭和の美人女優が演じるお嬢様という雰囲気だ。
背中に流れる長いストレートの黒髪も、やはりまだまきではない。

長方形の鏡に映る長身は、純白のナースの制服を着ている。本物の制服ではなく、パーティーグッズショップのネット通販で買った「スフレ衣装」。実際にはありえない膝上のミニスカートだ。

白衣の胸を押し上げるバストはDカップ。背が高く、手足がすらりと長いので、華奢な印象だが、半袖のミニスカートから伸びる腕も脚も女らしいまろやかさがある。

頭には、今ではほとんど使われなくなった白いナースキャップが載っている。両足にはあるしたてのかわいい白いパンプス。本物のナースはもともと仕事用の靴を履いているが、仮装だから免にしない。

流奈は両手の指で膝上のスカートの裾をつまんで、首をかけた。
「ねえ、やっぱりスカートが短すぎないかなあ？」

流奈の問いに応えて、鏡にもうひとつのミニスカートをコソレが現れた。流奈とは対照的に小柄で丸顔のナースは高橋佳衣。流奈の幼なじみで、今も同じメンションに住み、同じ大学に通っている。

「このミニスカがいじやない。八ロウインの仮装なんだから。それに下はショーツじゃなくて短パンなんだ。」
流奈の白衣のスカートが、佳衣の両手に握られた。

「いやー」といってミニスカートを押しさそうとしたが、佳衣のほうが華しい。スカートが高々とまくり上げられて、中の下半身を全開にされてしまっている。

現れたのは、スポーツ用のショートパジャマ。こんな派手なスカートまくりを外されたら大騒ぎすることだが、同じ仮装の親友の二人きりなので、鏡に映るあられもない自分の姿をじっくりとながめることにする。

「うーん、まあ、このミニスカートも悪くないな。」
「オールドマン」

「よし、今年の八ロウインこそ、渋谷のスクランブル交差点にくりだすぞー。死の箱庭で二人組が東京ちゃんにぶちめらわしたるぞー。」
「オールドマン」

「それは、この方言なの？」
「オールドマン」

「大都会に賣れる地方都市弁だべつちや。」
「オールドマン」

「あははは。」
流奈と佳衣が住んでいるのは、東京や京都から離れた日本の中央の奥、奥平所在地である某本市内のマンションだ。

今日は流奈の部屋で、八ロウインに渋谷へ行くために着る衣装を作っている。といっても今はまだ八月二十日。本番の十月末には二か月以上あるが、それまでにしっかりと仮装の調整をする計画だ。

二人は並んでミニスカートをいろいろボースを取り、自分と相手を見比べた。
「そうだ、流奈、この針金を切って。」

いろいろな道具や材料がごちゃごちゃと置かれたテーブルの上から、佳衣が太い針金をつかみ取って、流奈へ差し出した。針金の先端から三センチほど、赤いサイレンスで印がついてある。

「OK」
流奈は針金を受け取る。顔の前に近づけた。
針金が顔から十センチほど上の位置に来ると、口を小さく開いた。

とくくく。唇を集中しないで、すうすうと息を吸った。
口の前に、小さな赤い炎が現れる。太い銀煙の付くくらいサイズの炎だ。

口の中から炎を噴き出しているのではない。口を開けて、火をイメージする。口の前に炎が出現するのだ。流奈本人にも理由はわからないが、ものごとがついたときには自分自身でできるわかっていて、生まれつきのオフビート能力だ。自分はいわゆるミニタンクトだと考えている。

炎は自由に燃えることができる。思うがままに炎の色を赤から青へ変えて、強く燃かせた。形も楕円形から細くながらびて、幾分か十五センチの刃と化す。

青い炎の刃を針金に燃れさせると、映画で見るとソーサーのように針金があつたりと切断された。そして次々と針金を同じ様さに切り落としていく。

流奈は口を開いた。スィッチを切ったように、ひとりでに炎が消える。

焼き切った針金の先端を指でつまむと、思った通り熱くない。金属本来の冷たさを感じる。これもまた理屈はわからないが、流奈の炎に燃やされたり、溶かされたり、焼き切られたものには熱が残らない。わかつていても他人に渡す前には、念のために自分で温度を確かめている。

流奈と佳衣は針金をペンチで曲げて、アクセサリを作っていく。

「いつ見ても便利よね。流奈の炎は」

「父さんと母さんと佳衣以外の人間では使えないんだから、使い道がないよ。せいぜい自分の部屋でマツチの代わりに使うだけね。このマンションはキッチンがオール電化だから、料理にも使わないし」

「もったいないなあ。流奈はスーパーヒーローになりたいと思わない？ 東京へ行けば、ヒーローの誰かに会えるかもよ」

「わたしにヒーローなんて無理よ」

「流奈は口の火だけじゃなくて、身体も通すまで、力も強いのに、いつも普通のふりをしているでしょ。たまには腕力を思いっきりふるってみたいと思わない？」

「ぜんぜん。わたしはきちんと大学を卒業して、できれば日本文学に関わる仕事に就きたいの」

流奈たちが作業しているリビングルームには、壁に沿って本棚がいくつもあり、日本の古典から現代まで文学書と研究書が整列している。ある意味女子大生とは思えない部屋だ。

「わたしはなりたくてオフェイターになつたわけじゃないもの。たまたま力を持って生まれたユータントだからって、それで人生を定められたくない」

「わかつたわかつた。じゃあ包帯にチャレンジね。流奈、戻らな。じつとじてい」

佳衣がテーブルに置いていた白い包帯を持って、床に横座りする流奈の前にまわった。

「ナースの祖母さん直伝の包帯さばきを、ついに見せるときが来た。さあ、真に入れてよ」

アニメのキャラクターみたいな声を出して、佳衣の両手が流奈の顔に包帯を巻いていく。自分の言葉通り、プロ並みの手順で親友の顔全体にまわりと包帯を巻いていく。

「口から火を出すより、こいつを殺さじつたな」

「そうかなあ。ほい、完成。さあ、どしどし」

佳衣に引っぱられて、流奈は再び壁見へ向けられた。鏡に映る自分は、長い髪を外に出したままで、顔をすべて包帯に隠されている。ただ左右の眼だけが包帯の隙間から覗く。

映画を見る映画人間かミラクル人と化した三ツカ白衣のナースだ。

「すごい！ 本当に包帯を巻くのが上手いね。ああ、われながら不気味」

「ハロウィンにひったりでしょ。これで包帯に血溜をにませてあげれば完璧だね」

そのとき、流奈と佳衣の鼓膜を轟音が叩いた。

窓の外から、連続してなだなが壊れる音と悲鳴が聞こえてくる。

「なに!!!」

「事故!!!」

二人並んで窓から身を乗り出す。流奈の部屋は三階で、窓の下には道路と歩道がある。道路を挟んでマンションの向かい側の歩道に、大きな看板が落ちていた。向かいの十階建てのビルの屋上に設置されているはずの、市内にある大手不動産の看板だ。たまに目に入ったときは、さして大きいとは思わなかったが、歩道にあると重層を穿たなければ動かせないサイズだとわかる。

その大看板に、女が下敷きになっていた。看板の裏側を支える鉄骨の一本が、女の右胸の大股に乗っている。今のところ命の危険はないようだが、ショックで目を大きく開いたまま、マネキンのように硬直していた。

数人の男が看板のあたりを手をかけて、本腿の上から持ち上げようとしているが、重層のせいなのかともしない。

流奈は今まで、人の身に危険がおよぶ事故現場に直面した経験がなかった。しかしニュースで事件事故を見るたびに、自分ならどうしていたら、と思案した。自分が緊急処置にしているオフェイターの能力を人々に明かしてこそ救助できるだろうか、と何度も考えてきていたのだ。

現実には救助を必要としている人を目の当たりにした直に、気がつく二階の窓から飛び出していた。子供のころからの経験で、自分の身体はこのくらいの高さなら平気で降り立てるのわかつていた。

幸いにも道路の人々の視線は看板の下の方に集中していて、流奈がどこから現れたのかは誰にも気づかれなかった。ただ顔を白い包帯でぐるぐる巻きにした三ツカ白衣のナースが、いきなり背後から人々を押しつけて進み出たことに仰天している。

「すみません、どいてください。わたしはオフェイターです。わたしが助けます」

生まれてはじめて知らない人たちの前でオフェイターと名乗りながら、流奈は看板の下敷きになっていた女の前に膝をついた。鉄骨の状況を判断して、包帯の内側で口を開き、布越しに空気を吸う。

「できるー。わたしはできるー。重層に炎を操って、この女の人を助けられるー」

佳衣には使い道がないと思つたが、流奈は炎をコントロールする練習をすつとつけてきた。今まで炎を人や動物に向けたことはないが、自分の能力が簡単に生き物を殺傷できるのわかつていた。だからこれを完全に制御する責任がある。

「助けるっ」

口の前の包帯を揺らして、赤い炎が延びた。炎は色を青白に変えながら、細いロープのように長く伸びていく。周囲の人々から驚愕の音が上がった。

本腿を押しつぶす鉄骨を両手で握ると、炎の刃を慎重かつ速く動かして、本腿の左右の二か所の鉄骨に燃れさせる。熱したナイフでバタを切るように、鋼鉄が切断された。予想した通り鉄骨を切り離して、他の鉄骨が看板を支えている。

男たちが女の身体を引っぱって、女を看板の下から抜いた。

その後、上からコンクリートの大きな塊が落下して、看板に衝突した。ハツとして見ると、看板が設置されていたビルの屋上から、一台の乗用車の白い車体がコンクリートの壁を突き破ってはみ出している。屋上の駐車場の車が暴走して、看板に衝突したらしい。

「手がー」

運転席の窓から、腕が力なく垂れ下がっている。運転手は意識がないようだ。

（あの人も助けないと。ああっ！）

乗用車がカクンと揺れて、さらに前へ出て続いた。流奈の周囲から悲鳴がいくつも上がり、危険を感じた人々が走って逃げていく。流奈の目にも、今にももろもろと涙がこぼれ落ちそうに映った。

（今すぐ屋上へ行かないと、間に合わないっ！）

強く肺をついた直後、流奈は自分の身体が空中にあることに気づいた。視界が一気に下へ向かって流れ、目の前に白い乗用車がある。

「な、なに!!」

（おぼろげ）

反射的に顔を背後へ向けると、自分の背後の空気が揺らいでいる。白衣の背中から左右に陣炎が広がっていた。

「飛んでる!! わたし、空に浮いてる!! これわたしに何の能力なの? ああ、そんなことを考えても仕方ない!!」

両手を前に出し、パンパーを下からすく上げるように叫んだ。車体の重量が両腕にかかる。この重量ははじめての体験ではない。

高校生のときに自分の腕力を確かめたくて、父の軽トラを引っ張ったことがあった。

佳衣が言ったように、流奈は普通の人間よりも力が強い。普段は意識して腕力を常備的な女の子並みに抑えているのではなく、必要

なときに腕力を強くできるという感覚だった。父親から『ギアを上げたみたいだ』と言われたので、自分でも『身体のギアを上げる』

と表現している。

自動車を屋上へ押しもどすことをイメージすると、空中に浮かぶ身体が前へ移動する。そのまま車体を完全に屋上へ上げて、安全な

中央部まで押し移動させた。

運転席を見ると、中年男がハンドルにつぶぶして、ビクリとも動かない。ドアの外に出て右腕の腕を取ると、善いにも生きてい

る。胸をなでおろしている。パトカーと救急車のサイレンが聞こえた。すぐに屋上の鉄扉が開いて、救急隊員と制服の警察官がわらわ

らと姿を現す。

救命士が乗用車のドアを開けて、運転手を担架に横たわらせろ。

警察官が流奈に近づいてきて質問した。

「はじめて見るが、あなたはいわゆるスーパーヒーローなのか、名前は何ですか?」

「すみません、失礼します!」

流奈はすった声をほんのりして、屋上から一気に再空へ上昇した。

道路にいる人々がスマホのカメラを、上空へ向け始める。

（うわー 撮られてー）

それだけではない。機が飛ばしたのか、二機のドローンが下から流奈に近づいてきた。

（ドローンにカメラが付いている! というか、スクリーンの中を撮影されているっ!）

流奈もネットの動画で、うっかり目にしてしまったことがあった。女性スーパーヒーローをローアングルで撮影したエッチな映像

を。

「ひいっ! 逃げなへんやー!」

もつと速く飛ぶ、と意識した途端、顔に猛烈な空気が吹きつける。

（ああっ、すごい風! じゃない、わたしのスピードが上がってる!）

追いつかなくて二機のドローンが後ろに置き去りにされ、眼下の市街が録画を倍速で見ているように流れていく。強い風圧が顔に

ぶつかって、もつと空に揺らめきはじめた。頭の後ろで長い髪が盛大に乱れるのが、身体への唯一の影響だろうか。

「飛んでる! 本当に空を飛んでる! わたし、飛んでるっ!」

あらためて背後に目をやると、翼のまじりに広がった陣炎が、翼のように羽ばたいている。その動きはゆっくりとしたもので、どこも風

速で飛べる推進力を出しているとは見えない。それなのに流奈の身体は加速していく。

（このまま飛びつづけるのもまずいか）

そう思うと、ピタリと空中で静止した。身体が軽く前にカクンとなったが、それ以外の衝撃はない。空中に立ったまま、おそろおそろ

と指先で空中に触れてみる。本物の陣炎同様に実体といえるものはない。指がナース衣の布に当たる。

「ナース服は破れてない。服を突き破って、身体から出てくるわけじゃないわ。よかった、空を飛ぶたびに服が破れるのじゃなく、

それじゃあ方向を変えるのは……」

動物番組で見たハヤブサが空中で一回転する映像を思い浮かべた。途端に陣炎が揺らぎ、形を変える。流奈の身体が加を揃えて上昇

する。

「うわあー!」

ハヤブサというよりも遊園地のループコースターに、自分が入った気がする。気がつく間に二回三度と空中に円を描いていた。さらに

頭の中で稲妻を想像すると、シグザグに動きながら宙返りできた。

「本当に自由自在に飛べる!」

つい歓声を上げると、足下から暗黒が聞こえた。いつの間にか十人あまりの人々が立ち止まって、流奈を見上げていた。

「おっきいのがニュースになってるのかな。ナースの仮装で町の中を降りたら、もっと人が集まってきそう。仮装のままでメンション

とりあえずの打聞かして顔に浮かんだのは、市街を離れることだった。再び加速して、郊外に見える山々へ向かって飛んだ。長本

市は県内では最も大きな市だが、中心を離れば農村地帯が広がり、山脈の裾野が迫っている。

「山の中に入って、佳衣に連絡して。あつ、スマホ持ってない! ああ、財布も持ってないよ!」

自宅にいてもスマホと財布はテーブルに置いておくのが、流奈の習慣だ。ないとわかっていても、両手でナース衣のポケット

をまさぐってみるが、入っているわけがない。

「どこかで電線を借りない。あ、文庫!」

眼下に農村が見える。まばらな家の集まりの間に、交番の建物があり、制服警察官が外を歩いている。文庫から数メートルほど離れた

ところから音がはじまっていた。森の上へ向かって移動しようと考え、ひとりで背中からかかる陣炎が揺らめいて、まっすぐ飛んでいた流奈の身体がカーブを

きった。森の上から樹々の隙間へ降りて、地面に着地すると、顔に巻いた包帯をほどき、頭のナースキャップをはずして、三二スカーフ

ンピースを脱いだ。幸い、下には白いスポーツシャツとショートパンツを着ている。操縦いかもしれないが、気にしてはいられない。

ナースの仮装一式を木の枝に結びつけて、森から出ると、交番へ向かった。警官にスマホと財布を落したと説明して、固定電話から仮装のスマホにかけさせてもらった。

「よし」と、もしもしを言い終わる前に、受話器から仮装の雄弁的な声が轟いた。

「流奈、えらいことになってるよ！ まっまからテレビのロケルニュースで『未知の脅威』のことばかり！」

「アンソウナース？ なんなの、それ？」

「流奈のこと決まってるよ。スマホやドローンで撮影した流奈の映像がずっと放送されてる。撮影している人の『アンソウナース』と言ってる声が入って、そのまま流奈の呼び名になったの。二次大戦のヨーロップで、包帯で顔を隠したナースがあちこちの戦場に現れて、戦争に巻き込まれた一般人の救助をしたっていう『アンソウナース伝説』があるんだって」

「その話は後でするか」

「流奈が空を飛べるって知らなかったよ。どうして教えてくれなかったの？」

「今日、生まれてはじめて飛んだんだから、自分が驚いてる」

「そんなことがあるんだ」

「早く迎えに来て！」

「わかったわかった」

佳衣は交番の前までタクシーで来てくれた。

森の中のナース衣装を回収してからタクシーの後部座に乗ると、佳衣が常用のタブレットにニュースを見せてくれた。無我夢中でやっていた人命救助の姿が、様々な角度で撮影されている。「ナースだ」「ヒーロか」「はじめて見た」と様々な声が聞こえて、なんだかたまらなく恥ずかしい。

そして本当にアンソウナースと呼ばれている、テレビでも見るアウンサーもコメントターもタレントもそう呼んでいる。

「スパーヒーローウォッチャーなる読者の人物が、うきうきとした表情で解説もしていた。」

「今日、長崎市に現れたアンソウナースは、コスチュームとオフビート能力から見て、今まで一度も活動の記録のないヒーローです。私は新たなスパーヒーローの登場を大いに歓迎しますよ」

その後、アンソウナースという呼び名がついた理由が語られた。二次大戦のヨーロップで大勢の人が命を助けられながら、写真や映像には残らないという、顔を包帯で隠した神出鬼没のナース、かつては心霊の類と思われていたが、オフビートの存在が知られてからは、スパーオフビートのデビュー以前に秘かに活動したスパーヒーローたちのひとりだと考えられているという。そして二次大戦が終わるとともに、アンソウナースは現れなくなった。

マンシヨンの自室にもらした流奈は、バスルームでシャワーを浴びながら生じた。

「アンソウナースなんて全然知らなかった」

「バスルームのドアの前に立つ佳衣が応える。」

「まあ、ヨーロップの戦争秘話みたいなものだし、ググっても日本では歴史マニアしか知らないみたいよ。ホラーキヤラのものでも、周知で顔を隠したナースの仮装を考えたのにビックリだよ。下手したら著作権侵害になっちゃうかも。で、流奈はこれからどうするの？」

「え、どうするの？」

「もちろんスパーヒーローデビューした流奈は、これからどういうヒーロー活動をするのか、と聞いてくる」

「カラス戸を勢いよく開けて、流奈は濡れた顔を出した。」

「スパーヒーローはやらない！」

「ええー、残念。アンソウナースとは違う別のコスチュームとヒーローネームを考えたい」

佳衣は目を輝かせて、ニンマリと笑って、流奈を見つめた。

「どんなのか、知りたいでしよ？」

☆

長崎市で起きたビル火災は、救助活動が滞っていた。炎に迫られて屋上へ逃げた人々に、梯子車がかかかない。

消防隊の隊長はいくつもの窓から炎を覗き上げるビルを見上げて、躊躇みしながら救出方法を懸命に考えている。

ふいに、背中をつつかれた。ふりかえると、黒髪の頭に白いナースキャップを載せて、顔の上半分を隠す白いアイマスクをつけた若い女性がいた。

「着ているのは身体にひらいたりとした白い服。半袖のシャツと膝上までの丈のスパッツが一体化したような衣装だ。ふくらんだ胸の中心には、炎を上上げる赤い十字の模様があら。」

両足には白い護文をつまみ。

「あ、すみません、わたしは空を飛べます。お手伝いできることはありませんか？」

「隊長はスパーヒーローに会ったことはなかった。超常の正体の味方たちはニュースの向こうの存在だ。それでも臨時に理解した。」

「頼む、来た何人も屋上へ閉じこめられている。救助してくれ！」

「あ、梯子車のコンドヲをはずしていいですか？」

「かまわない。あのコンドヲを使ってくれ」

「隊長が梯子車から伸びるコンドヲのひょうろを指さした。」

「はい」

流奈は背中から陣炎を浴びた。縋綱で自由田に陣炎を出したり消したりできるものになった。空中の移動も思った通り。すべり止しを下ろすそばに上昇して、両手で梯子をしかりと握ると、コンドヲに乗っている消防士に声をかけた。

「隊長さんの許可をもらいました。コンドヲをお借りします」

「えいっ！」

驚く消防士にまじまじと見つめられる前で、流奈は口を開き、青い炎の刃をふるって、棒子を切断する。両腕に大きな重傷がかかるが、流奈の身体は空中に浮いたまま。またまた余裕を感じる。もつと重いものを持ち上げられるたろ。肉体のキアを上げた状態だと、どれだけ腕力を出せるのか、自力でも押し置けない。消防士を乗せたゴンドラを持って、ビルの上層に迫って、炎を避けながら下る。たちまち屋上に出ると、ゴンドラを置いて、声を上げた。

「みなさん、助けに来ました！ わたしは知らないと思いますが、ちょっと前にニュースでアンソウナスと呼ばれた新人ヒーローです。ゴンドラに乗ってください！」

屋上には五人の男女がいた。全員がサラリーマンのOL。突然のことにとまらっていたが、消防士たちがさがされて、ゴンドラに駆けこんだ。

五人全員がゴンドラに乗ると、流奈は合計六人分の体重をもたないで屋上から飛翔した。五人が今にも墜落しそうに感じて、口々に悲鳴を上げるなか、流奈は慎重にゴンドラを道路へ着地させた。救命隊員が駆け寄り、五人の体調を診はじめる。

流奈は安堵の息をつく間もなく、彼女に呼ばれた。別の階にも逃げ遅れた人がいる。救助してほしい。

消防士が使用しているトランシーバーのホーチを差された。流奈はホーチを腰に巻くと、再び背中の上を伝って飛び立った。ビルが爆発すると、流奈はわざと目かくように飛んで、じやまにならないように火災現場から離れた公園に降りた。たちまち追いかけてきたマスコミとカメラをかまえた野次郎に包囲される。

矢張り早に飛んでくる真摯の声に抗って、大きな声で叫ぶ。

「わたしは前にアンソウナスと呼ばれたオビートです。あのときはまたまたま八口ワンの仮装の準備をしていたときに、事故を知って飛び出しました。ですから仮装のアンソウナスとわたしは全然関係がありません」

とりかかむ人の輪のあちこちから朱音の音が聞こえた。流奈は「単純すぎないかな」と思ったが、住衣は「近ごろのヒーロー名は考えすぎなのよ、日本の元祖ヒーローのキャプテン・スカイや、サンダークラップスのスターサンダーを真似っへきよ」と主張されて、押しさらされてしまった。

マイティナスといっしょに前にとんな反応があるかと内心ドキドキして待っている。拍手が湧き起った。ホッと息をついて、「結果をつづけた」。

「あの、わたしは犯罪者で騒ぐことはできません。事故や災害の救助だけを専門にします」

記者のひとりから質問が飛んできた。

「その白地の胸に燃える十字の新コスチュームは、サンダークラップスのフレアに似ているようですが、フレアとは関係があるのですか？」

サンダークラップスは東京で活動する比較的新しいスーパーヒーローチーム。女性四人のチームで、フレアはその一員だ。空を飛び、おそろく日本のヒーローたちのなかでも有数の腕力を誇る。

フレアのコスチュームは、白いミニスカートのワンピースで、胸には『本陣閃光』のヒーローネームにさわしく黄色い太陽をデザインしたシンボルマークを描いている。

今着ているコスチュームも、流奈と住衣の共同の手製だ。胸の炎の十字は流奈のアイコン。

「わたしはサンダークラップスに直接会ったことはありませんが、ニュースで活躍は見えます。このコスチュームはフレアたちへのあこがれの表れです」

人の壁の奥から下卑た男の声が上がった。

「月刊ヒーローピンクマガジン」の巻です。フレアといえば、ちょっと前にフレアの工口の中継があったけど、つわ、離せ、なにをやる、うぐっ」

記者の周囲の人々が『いかげんにしろ！』と怒鳴り、口をささぎ、羽文い絞めにして「かへ連れて行った。新米スーパーヒーローは安堵の息をついた。

サンダークラップス！リボーン！マイティナス

行政区分上では農本市内にふくまれている山の中で、登山者から脱落した崖に足を滑らせて動けない、というスマホの連絡が山岳救助隊本部に入った。

山岳救助隊からすぐさま流奈のスマホに活動要請の電話がかかった。このスマホは流奈が普段使用しているものとは別のもので、県警本部、消防本部、山岳救助隊本部だけに番号を教えたマイティナース専用だ。

流奈が活動要請を受けたのは、日曜日の午前十一時すぎ、ひとりで市立図書館の書架の間で大正文学の資料を探していたときのこと。すぐさま図書館を出て、出勤を承諾すると、佳衣のスマホに連絡した。落ち合う場所を決めてから、図書館の扉の陰に身を潜めて、バックから出した白いマスクを顔につけて、頭にナースキャップを戴せる。

普通の衣服でもマスクとナースキャップをつけていれば、マイティナース専用版として認められるほどには有効になった。「よし！」

胸の前で両手の指を千エッと握って気合を入れる、背中から腫れをひき、一気に背空へ飛翔した。

登山者が岩の下敷きになった山の麓で、バイクに乗って駆けつけた佳衣と落ち合った。インドア派の流奈の親友だが、佳衣はアウトドアの趣味をこなし、一輪免許を持っていて、マシヨンの駐輪場に愛車のバイクを置いている。

佳衣は背中の大きなキャンパン用のザックから白い半袖とスパッツのボディスーツとブーツを出し、流奈が色いで着替えて、マイティナース完全版となる。

「マイティナース、気をつけてね」

「ありがと、エイト」

マイティナースになっているときは、佳衣も「ローネームほくエイト」と呼ぶことにした。佳衣自身の発案で、看護助手を雇味する英語のひびくナッシング・エイトから名付けた。流奈はマイティエイトしようと言ったが、佳衣が断った。

流奈からマイティナースになると、空を飛ぶ、山岳救助隊本部に降りた。状況の説明を受けてから、医師をヘルトで背中固定して、両手に救急手帳を持って、山へ向かって飛んだ。

幸い、要救助者はすぐに見つかった。脚を押さえていた岩は、マイティナースの腕力で離れなくなった。医師の応急処置を受けた後に、マイティナースは登山者を抱えて、麓の病院へ運んだ。

「救助は終わったよ、右足は切断するかもしれないけど、命に代わらないよ」

「そいじはよかった。今はさっさと別れた場所の近くの河原にいざから来て、上から見えると思う。すぐここを持ちのいいところだから、JUMPINにしようね」

「OK、すぐに行くから」

スマホの地図を頼りに飛ぶと、眼下の緑の森の中に川が通っているのが見える。川沿いに開けた空き地があり、エイトが白いタオルを振りまわっていた。足元にはシートが敷かれて、バスケットと食器と炭火物が並んでいる。

マイティナースはすくと川岸に降り立つと、背中を負った東岳靴をマイティナースへ差し出した。

「救助隊からもらったって、手作りの山菜料理をもらっちゃった。本当はスーパーヒーローが助けた人から贈り物を受け取るべきじゃないと思うけど、これくらいいいよな」

エイトが東岳靴を開いて、タッパーに入った山菜の煮物を見て、小鼻をふくらませて匂いを嗅いだ。

「おいしそうない！ いいんじゃない。ささやかな感謝の証くらいは「そう」になっちゃって」

マイティナースの活動を始めたときは、レスキューのプロたちから仕事を奪うことまで文句が出たが、いち早く人命を救助できることを感謝されるばかりだ。マイティナースがいなければ、現場に難材を運ぶだけでも時間ばかり、また悔しい思いをしたかもしれない。と何度も言われた。

マイティナースはマスクとナースキャップを取って、流奈にももらった、コスメュームの白いボディスーツを着たままだが、黒縁を出せば、鼻の上では流奈だ。

そしてエイトも、見た目はなにも変わらないが、佳衣にもさ。

流奈と佳衣の二人はシートに座り、バスケットから出した食パンと保存食とペットボトルを食器に並べた。マイティナースが人里離れた場所に出動したときのために、日よから用意しているものだ。

二人して涼しげな川面をながめながら、山菜に舌鼓を打ちつつ、佳衣はスマホにニュース動画を出した。

「もうマイティナースの救助活動がニュースになっているよ、さすがに街中と違って動画の数は少ないね」

「母さんからもメールが来た」

流奈が自分の普段用のスマホの画面を、パートナーに見せた。

『また人を救ったのね。私もちも高いです』

流奈はマイティナースとして活動する決意をしたときに、両親に話した。他のヒーローたちがどうしているのかは知らないが、親に秘密にするには、流奈にはありえなかった。

県内で大きな農場を経営している祖母と今咲夫妻は、今から十九年前に自分の畑で赤ん坊を保護した。当時は赤ん坊は赤ん坊のまま終った。該当する出生の記録もなく、赤ん坊が連れ去られたという通報もなかった。一度も診察を受けることなく出産した。言葉は悪いがいわゆる野良児産が捨てたのではないかと、警察は判断した。

今咲夫妻は赤ん坊に流奈を交えて、養子にした。

やがて流奈がオペレーターの能力を発揮しても、養父母の愛情は変わらず、大学生になった今も愛情と仕返りを怠りてくれている。

「父さんと母さんからは、マイティナースはさっさとやめていい。でも必ず大学を卒業して、好きな学問の世界へ行くように」と言われて

101

「いいなあ、親が夢を後押ししてくれただけだから、ひゃっ！」

「あああっ！」

心地よい川のせせらぎを聞き流して、背後から駆け付け大きな音が出た。そろそろふりがあつた二人の前で、鞍を突き破って、人影が飛び出す。そのままボールのように走り、川べりの石の上でんぐり返して倒れる。

「……ひびく」

大小の石が並ぶ地面に磨はいになつてゆく男は、チェックのシャツにジーンズにスニーカー。いかにも専門的ではない山歩き「マッシュン」だ。
「あ、大丈夫ですが」
「じつかりして」
流奈と佳衣は駆け寄り、二人がかりで男を起した。

持ち上がった顔は、二十代半ばの青年だった。公共放送のニュース番組を担当する新人報道アナウンサーという雰囲気、真面目で誠実さを感じさせる整った目鼻立ち。
好感の持てる容貌だからこそ、顔や右の頬についた擦り傷がいつも痛々しい。シャツやジーンズのあちこちにも土や泥がついて、普通の登山道を歩いてきたのではないことがうかがわれた。
上体を起こして地面に座った青年は、流奈の顔をしげしげと見つめた。

「その炎の十字のクロスチュームは、ナースキャップとマスクがないけど、もしかしてマイティナース」
「あつ、えつ」
流奈はあわてて右手で顔を隠して、左手をハタハタさせる。

「違う違う！ これはただのクロス！ ただのマイティナースのファンだから」
「えつ、で」
「おれはな」
怪訝な顔になる青年の背後で、再び動きだわめいた。さっきよりも大きく木々の葉と枝が揺れて、カラカラとしゃがれた声で聞こえる。

「見つけたぞー」
断の枝をへし折り、葉を散らして、新たな影が又と出現する。
異様な人物だった。ヘビ級のブロスライ並みの全身を、スピードスケート選手が着用するウェアのよななびたりした衣服で被っている。その表面には爬虫類の鱗そっくりの凹凸があり、熱帯のジャングルに棲息するトカゲや蛇さながらの力強い模様がある。そのくせ顔だけは白い楕円形の凹凸のない板面、目の部分にだけ二つの穴が空いていて、着用者の人間の頭が覗く。

「二層壁障子、抵抗はやめろー」
威圧的な命令ととも、爬虫類の太い右腕が前に突き出された。一手には銃が握られている。ガンマニアが見れば「なんだ、それ」と画を上げそうだが、世界中のどの職業用車銃も使用していない。サイクスはサブマシンガンで、持ち出しコーチェットしたばかりに表面に藍のモールドがあり、キョウリした派手なカラーリング。
子供向けのおもちゃにも見えるが、間違いなく本物の武器が持つ迫力がある。

「銃！ 銃を持って！ 人を撃つとしてるー」
そう認識した瞬間、流奈は後先考えられずに反応していた。口から青い炎を吐き、鞭のように伸ばして、爬虫類男の手にある爬虫類マシンガンを薙いだ。
スッパリとマシンガンが二つに切断される。

後から考えれば、少しでも炎の刃の軌道がずれていれば、男の右腕を切り落としていたかもしれないが、今はその存疑は浮かばなかった。
「えつ、なんだ!?」
爬虫類男にはなにが起きたのか、わからなかった。一瞬、青白い輝きが自分に向けられたかと思うと、握っているマシンガンの前半分がなくなり、きれいな断面を見せて足もとに転がっている。

「まやあああつ」
流奈は悲痛に聞こえる叫びを発して、地面を蹴って、正面から爬虫類男の分厚い胸板に飛びこんだ。猛烈なタックルを食らわせて、巨体を背後に押し倒す。根っからのインドア派の流奈に、格闘技の心得などない。無教養中で両手で爬虫類男の右の足首をつかんだ。
「まやあああああああああつ」
両手を強引に振り上げる。自分よりも身長も厚みも大きく、何倍も体重がある巨体が空中に浮かぶ。そのまま足首をつかんだ両手をムチャクチャに振りまわした。子供にもあそばれるアキションフキユアのこころ、爬虫類男が空中をクルクルと回転させられる。

「まやあつ」
無意識に両手の指を開いた。遠心力で爬虫類男の身体が何メートルも飛び、頭から断つ中に突っこみ、そのまま動かなくなる。断つら突き出たたくましい尻と面脚から力が抜けて、だらりと伸びた。
そのとき、別の断の中から、流奈を佳衣も聞いたことがない音がババババッと連続して鳴った。

流奈は白いボディースーツに包まれた胸に衝撃を感じる。軽い痛みとともに、足もとに小さな金属がいくつも落ちた。刑事ドラマでしか見たことがない形をしている。
「銃弾ー、う、撃たれたー、わたくし、撃たれたー」
レスキュー専門のヒーローをやっているマイティナースは、今まで銃撃を受けたことはなかった。建設中のビルから落ちてきた大きな絶縁材が激突したことはあるが、身体をギアを上げている間は負傷しない。よく考えれば銃弾も同じだが、心理的な意味が大きく違う。

「うわあああああつ」
叫びごとにも口から炎が放たれる。マシンガンを切断した青い刃ではなく、火花放射器のような赤い大きな炎が、射撃されたかと思う断に襲いかかる。
「Heyああつ」
野太い悲痛とともに、燃える断の中から気絶した爬虫類男と同じクロスチュームのマッチョが跳び出した。

「このー」
撃たれた精神的ショックを振り棄てて、流奈は第一の爬虫類男の白い板面に叩きこむ。素人のパンチだが、ギアを上げた流奈の常人を超える威力マッシュユから繰り出された一撃、常人にかわすのは不可能だ。
「クケッ」
と、炎の音を出して、爬虫類男の身体が地面に撞たわった。

「火つ！ 流奈、火を消して！ 山火事になっちゃうー」
「火つ！ 流奈、火を消して！ 山火事になっちゃうー」

「佳衣の叫びを聞いて、流奈はあわて斬を燃やす炎に意識を向ける。自分の口から出た炎は後からでも自由に操れることが、子供のころからいろいろ実験してわかっている。消えろ」ときくと瞬時に炎が鎮火した。

「佳衣が意識のない二人の役人物の呼吸を確認してから再行した。」

「すていよ、これで流奈は終で撃たれても平気だとわかったね。」

「平気じゃないよ！ 死ぬかと思つた！ ほう！」

「流奈はコスチュームの胸に付いた黒い痕を指さしながら、佳衣に歩み寄り、ギョッと指さした。」

「佳衣に当たらなくてよかった。今日ほど自分の身体が凍文でなかったと思ったのはじめて。」

「あの、やっぱりマイティナースですすか？」

「背後から、一團暗黒の影が呼ばれた青年の音が聞こえた。」

「二人がかりかえる、降史は地面に正座して、真摯な表情で見つめてくる。」

「助けてください。ほくの両親を救い出してください。」

「はいはいはい。」

「ほくの両親……」

降史の両親は、一般的には知られていないが優秀な結学者だといふ。最近、バイオテクノロジーの分野で画期的な成果を出した。だが論文を学会に発表する前、犯罪組織に拉致された。そして降史のころ、隠してある研究データを盗んでくるように脅迫が来たのだ。

呼び出された場所が、この山の中にある犯罪組織の秘密基地。組織はデータを渡しても両親を解放するつもりはなく、降史も殺されるまで殺して逃げてきて、流奈と佳衣に運送した。流奈に倒された二人は、組織の下級の構成員だ。

「今にもおさんと母さんが殺されるかもしれない。マイティナース、助けてください！」

「わたしはレスキュー専用で、今までは悪人と闘ったことなんてない。」

「わたしは普通の人間にはない力がある。その力を、人命を救うために使った。使わないでいるの……」

「流奈はとどろきの佳衣へ顔を向けた。佳衣も顔を向けて互いに見つめ合い、すくなくうなずき合った。」

「マイティナースの出番だね。」

「最後まで言わないで、わたしもエイトするよ。わたしは二階層さんを通して、バイクで安全なところまで送るよ。」

「お断り。」

「流奈はシートに置いたオースキャップとマスクを頭と顔に装着した。マイティナースとして、降史に自信を感じさせ、安心感を与えようとした。声に力をこめた。」

「両親のことは、マイティナースにまかせてください！ 二階層さんはパートナーのエイトとともに安全なところに身を隠してください。」

「ありがとうはいはい！」

降史はシャツのポケットからプリントした写真を出して、手渡してきた。受け取ると、白目を着たが良そうな中年の男が、妻を抱きかかっているのを背にしてながく並んでいる。

「父と母を拉致した犯罪組織の名前は『爬虫類のハニー』。」

「マイティナースとエイトはそらつて組織を倒れているカワルな結構のマッチョ男へ向けた。」

「それで下つ端がああファッショント、ああマンガンなんだ。」

「無駄に殺つて、お命はかかってねえね。」

下つ端の手足を縛り、統一コスチュームのポケットにあった花柄のスマホで地図を出す。秘密基地までの場所がわかった。地図を頼りに山奥に分け入ると、崖にぶつかった。下つ端のスマホに反応したのが、ひとりだけで岩がスライドして人工の穴が開いた。

マイティナースははじめての体験に緊張しながら、コンクリートで固められたトンネルの中をそそぞそと歩いた。幸いにもトンネルの中では誰にも遭遇しなかった。

「監視カメラがないのか、悪の組織も意外と人手不足？ 面接で、入社したらあんな姿な服を着なくちゃいけないと言われたら、わたしも怖いな……」

緊張しながらも、ついでにたらないことが頭に浮かんでしまふ。ニュースではスーパーヒーローとスーパーウィランとの闘いがよく報じられるけれど、それは脚色での出来事だ。田舎の農家で育ち、地方都市の大学に通う自分には、遠い世界の話でもうにもピンとこない。

無人のトンネルの突き当たりの狭い扉で、やはりスマホが自動で開けた。扉の向こうを自にした途端、マイティナースは構立ちになった。

そこは高校の教室ほどの広さの部屋だが、中央を透明な壁に仕切られていて、いっぽうにだけ人がいた。すべて二十代らしい若い女が十数人。降史の両親は見当たらぬ。だが降史の両親の存在を探すとなく、新人ヒーローの意識には浮かばなかった。

透明な壁をくぐり見えない場所にいる女たちは全員が美しいが、そらつて遠くを表情、トキメキ、トキメキと一番粗い見た麻薬中毒者のようだ。グラビティアイトルのように抜群のフロートシヨンの身体には、一枚もまたず、豊満な乳房も女の秘密の部分もさらけ出しているが、羞恥の様子は微塵もない。

裸の女たちはなにをするでもなく、ただ床に座りこんでいた。

さらに異様なことに女たちの裸の顔面や尻や股間の周囲を、多数の蛇の群れが這いまわっている。

蛇は長さかまちだが、すべて黒い。爬虫類の鱗が持つ光がなくて、まるで闇を凝り固めたようだ。田舎の農家の邸であるマイティナースにして蛇はよく普通の動物で、悪感情は持っていない。だから二十個体的になが違つとは言えないが、普通の蛇とは違つて異様なものを感ずる。

黒蛇たちはわんわんぐねりながら、床だけではなく、女たちの肌にも這い上っていた。首や脚体に巻きつき、乳房の表面を這み、太腿の間にも這りこんでいる。明確な毒痕を持って、裸の女たちをまとわりつけているように見える。

「こんな……こんな！」
あまりに非日常でショッキングな光景を見せつけられて、マイティナスの脳内がコズチエム同様真っ白になる。その白の下から、怒りの赤い炎が噴き上がった。状況はさうばかりわからないが、女がこんなあつかいをされるのが正しいはずがない。事故や災害ではありえないものが、目の前にある。

「これは悪だ！」
見まわしても女たちを閉じこめている部屋に、出入りの口は見当たらない。
(炎で透明な壁を焼き切る。)

口を開いたとき、背後から声がした。調子の悪いスピーカーから流れたようなノイズ混じりのひずんだ声だ。
「なんだ、おまえは？」
ふりかえる。亀がいる。

後ろ足で直立する人間大の亀。床に立つ二本の足から亀の頭部まで二メートル近い全身が、磨きあげた金のように輝いている。有名な亀の怪獣映画の着ぐるみをおぼろげに、海亀に似た頭のくちばし状の口の先端から、甲羅から伸びるしっぽの後端まで、明らかに全身が黄金に見える金属製だ。

甲羅から伸びる左右の前足の先には、それぞれ五本の指があるので、やはり中に人間が入っていると思われる。
海亀の頭は、左右の眼孔の中にある眼球も金属だ。中に人の顔があるにしても、外からはまったくかえなかった。
とはいえそんな細部のディテールを、マイティナスが認識する余裕はなかった。女たちが受けている虐待への怒りを燃料にして、口から吐いた細く研ぎ澄ました青い炎の刃を、黄金亀の甲羅の腹へぶちこむ。厚い鋼鉄を貫通し、焼き切る炎の刃が、大亀の腹にぶつかり、その表面を滑って広がった。

(ええっ！)
炎の刃を止めるべく、大亀の金色の腹の表面に、なんの装花も見られない。溶けた痕も、切れた傷もない。黄金の輝きはまったくくさがすんでいなかった。

「そのコズチエム。その口の火。新人ヒーローのマイティナスだ！」
亀の口が力ずかりと開閉して、外国人が話しているような訛りのある日本語が出た。口が大きく開いても、覗けるのは金色の口内と舌だけ。

「小娘の火を、この『黄金の甲殻』様のエイリアンワールドには熱くも痒くもない！」
「のうっ！」
あらためて二度二度と炎の刃で斬りかかるが、ゴルテンシエルの言葉通り、甲羅を、手足を、頭を、表面で炎を消らせるだけで、なんの効果もなかった。

「うわあっ！」
どうしていいかわからず、背中を背を打って突進し、両手の拳でゴルテンシエルの腹に殴りかかる。まるで低反発素材を殴ったような感触があり、自分の腕力が吸収され、散らされているのがわかった。

「強いッ！」
幸しげな嘲笑が、マイティナスの頭上の亀の口からあふれる。同時に腹の甲羅がスライムのように『溶』け、二つの拳が金色の金属に呑みこまれた。

「あああー！」
手だけではない。ゴルテンシエルの面足が形を崩し、溶けた顔のようにマイティナスの左右のブーツにからみついてくる。あわてて手足を這らうとしたが、ギアを止めた剛力をもてて、黄金のスライムから逃れられない。

「もうなうた、亀を連れて、トンネルから飛んで逃げるさ！」
「あひっ——」
喉に鋭い痛みが走った。いつの間にか黒い蛇が影のまにに首を巻きついて、大きく開いた口から生えた二本の鋭い牙を、喉に深く突き刺していった。

「あ……ああ……」
「痛……痛が身体で……」
マイティナスの意識が、急速に揺蕩していきいへ。

遠くから聞こえる山影のよう「眼」前「に」いる「ゴルテンシエルの声」が「ぼややり」と聞こえた。
「じじい、いらん手出しをするんやねん！」
「悪いが、スラスラスボンサーの指示でな」
はじめて聞く奇妙な声とともに、マイティナスは闇の中に落ちてた。

マイティナス
リボン
スライム
クワッ
デュー
サンダー

十分に食欲したように、マイティナースはスッキリと目が覚めた。目の前にはじめて見る大きな部屋が広がっている。山の中に築いた秘密基地らしいコンクリートのトンネルや、透明な牢獄だけの殺風景な部屋とは一転して、テレビでしか見たことのないヨーロッパの貴族の豪邸の中のような部屋だ。厚手のカーペットの上には、立派な黒いテーブルいくつかの椅子。派手な装飾はないが、ひと目で高価なアンティークだとわかる。さらにテーブルの上には、おしゃれな陶器のティーセット。マイティナースも名前を知っているヨーロッパの有名ブランドの高級食器だ。とても快適そうな室内だが、マイティナースは快楽とはほど遠かった。身体を動かさぬのだ。目の前の優雅な装飾には似合わない鋼鉄の籠を背にして、森状態にされている。左右に伸ばした両手の首とそろえて床に立つ両足の足端に、金色の金籠の物がはめられて、前後の壁にくっつけて立たされていた。

「こんなもの。」
手足に力をこめて黄金の枷を破壊しようとしたが、びくともしない。金籠や籠が頑固というよりも、思ったように力が入らない。
「腕力でめなら、焼き切る。」
口を開き、青い炎の刃をイメージする。

出ない。幼卑のころからなんの努力もなしにできたことができない。何度モ口を開けては開いて、意識を集中して、気をこめても、炎を出せなかった。
「無駄だよ、マイティナース嬢」
部屋に若い男の声 flowed。こんな状況でなければ思わず聞きほれてしまいうるに突やかな魅力にあふれた、人妻男性両儀のような声だ。視線をめぐらしても見つからないが、どこかにカメラとスピーカーがあるに違いない。

「特別な蛇の毒がまわって、マイティナース嬢のオビート能力は使えなくなっているのだ。能力が消えたわけではないから、安心してくれたまえ」
マイティナースの対面にある壁の木製ドアが開き、二つの異様なものが入室してきた。
「こうして寝かしている、マイティナース嬢は羽を付けて標本箱に収められた蝶のようだ。じつは美しい」
イクメンボスで、美術品を愛でる口調で語ったのは、目の前にいる毒師。
それもティラノサウルス・レックス、
「いってモザイクは人間レベル。そして現在のティラノサウルスの復元図にある身体を地面に水平にする姿ではなく、昭和の恐竜図鑑に描かれたような身体を直立させている姿勢だ。しかも前脚はティラノサウルス独特の小さなものではなく、人間と変わらない形。かつて科学者が推測した、恐竜が知覚生物に進化した姿恐竜人間に似てなくもない。しかしティラノサウルドは、武器で大きな頭の止らぬシルクハットを載せてはいない。右目に実用になるとは思えない丸いレンズの片眼鏡をくっつけていない。太い首に、黒い襟ネクタイを巻いていない。右手に黒いステッキを持っていない。イギリス紳士のコックレをしたティラノサウルス人間、という漫画じみた姿を、マイティナースは二エース見たことがあった。

小笠原諸島の無人島に送られた、危険レベルの高いオビート犯罪者専用の矯正刑務所、通称オカサワラ地獄。かつて日本で最も厳重だと評した監獄が、月食と名乗る女スパイヴァンに襲撃されて、多数の囚人が逃亡する大事件が日本中を騒がせた。脱獄囚のほとんどはスパイローと警察の活躍で再収監されたが、一部の囚人はまだ発見されていない。
そのひとつの黒い悪名を、マイティナースは呼んだ。
「ミス・ター・T・レ・レ・レ」

「残念ながら違うね、新たな自由を得た僕は『紳士 暴君 龍』と改名したのだよ」
大きな口が開閉して、中に列をなすナイフじみた牙が動くたびに、美しくもつかい男の音が出る様子を見ているだけで、マイティナースは正気を失ったように感じた。
「紳士らしく自己紹介しよう。僕が犯罪組織レプティルホルのオーナーだ。レプティルホルは僕の富沢な財産で運営されている。新しい名前はどうもかく、この怪物が金持ちだということも、マイティナースだけでなく世界中の人々が知っている。珍しく本名も素性も公表されているスパイヴァンだ。」

本名は桂 大路 安政、明治維新も太平洋戦争も生き抜いた公家出身の富豪一族の一員。しかし二十四歳のとき「一族を皆殺しにして、一族の遺産をほとんど奪って、姿を消した。このときに日本だけでなく世界中の経済に大混乱を起したために、世界で最も多数の被害者を作った犯罪者ともいわれる。」

姿を消す前からイギリス紳士と恐竜が好きだと公言していた安政は、開科学校に依頼して、自分の肉をティラノサウルス紳士へと改造した。そして卓越した手腕でさらに権やた莫大な財産と、異常な愛をもって、オビート犯罪者として世界に再登場したのだ。「さてマイティナース嬢から見て右にいる彼とはおなじみだね。レプティルホルの一員コールアッシュエル君だ。新人ヒーローは知らないだろうが、コールアッシュエル君はロシアの傭兵屋として業界では有名な仕事人だ」
「おれしくん」

ティラノサウルス人間の右隣に立つ黄金に輝く大蛇が、田舎から伸びる首を上げた。
「もうひとり、紹介しよう。レプティルホルの重要な知恵袋の『木古の毒』だ」
蛇の右手に握るステッキが、左側を指した。

しかし、そこには誰もいない。と悪くも、床に伸びるセントルマン・レックスの影の中から、大きな蛇がズルルルルと頭をもたげた。
蛇の頭と長い首につづいて、平面の影の中から人間の形の胴体が抜け出る。衣服をなにも身につけていない瘦せた人間の上半身の影の部分から、うねうねと動く蛇の鎌首が生えているのだ。

腰から下には脚がない。再び蛇の胴体になり、何メートルも伸びて、大きくくねくねを巻く。先端はセントルマン・レックスの影の中に消えて見えない。
胴体と肩から生えた両腕は人間の形状をしているが、頭や首や下半身の蛇体と同じく、光沢のない黒い鱗に覆われていた。

「なにを思っているの！今は悪人にいたがらわれているのに！」
「もう一度乳首をひねって欲しいんじゃないの？遠慮はいらさない」
「また右でゴールデンシルから自分の思考を先取りする言葉を言われて、マイティナースは懸命に言い返した。
「遠慮なんてしてない！」
「そうかい、それならエイリアンゴールドを先に進ませるぜ」
胸にとどまっていた金の薄膜が、再び進撃を開始する。胸から四方へ広がり、背中と腹を包み、胴体全体を金色に染めていく。
「や、あ、そこはー」
（そこはー）

下半身のスパッツ状のコスチュームの中に、白いストッキングを穿いている。股間だけでなく、下腹部と臀部をしっかりと保持して防護する安心のデザインのはずだった。容赦なくストッキングの内側に金属が侵入してくる。黄金の侵略者にへそを埋められて、下腹部の曲面を滑り落ちる。尻たぶを登られて、尻の谷間を流れ落ちていく。
（そこはー）
「あ、あ、そこはー」

「再には出せない部分に、エイリアンゴールドが到達した。恥丘を埋めつくされ、肛門に塞がれてしまう。
「オーシ、完成したよー」
「ゴールデンシルが両手をマイティナースの胸から離れた。マイティナースの身体を包む金属とゴールデンシル本体が分かれるが、双方に変化はない。マイティナースの身体はコーディングされたままだ。
「俺が作ってやったマイティナースの新コスチュームのお披露目だー」
黄金の指で白いコスチュームをつかまれた。市販の生地で作ったお手製とはいえず、それなりに頑丈な布が一気に引き裂かれる。さらにストッキングとストッキングを破られ、むしり取られた。
「あああー」
（全裸にされたー）

と、思った。実際にはマイティナースの身体には、失われた白いコスチュームとまったく同じ形の金色の薄膜がある。胴体をひたりと包みこんでいるだけだ。両腕の二の腕までの袖や、両脚の太腿のなかにはまでのスパッツまでそっくり再現されている。胸のふくらみには、燃える十字のマークまで金属のむすかの厚みの差で表現してあった。
シエントルマン・レックスが右手で、役に立っているとは思えない右目のモクールの位置を直すはずをした。
「何度見ても、ゴールデンシル君のこの技は美しいものだね。美術作品として世間に公表できないのが、とても残念だよ。マイティナース嬢ももっとよく見たまえ」
いつの間にか部屋に入っていたおそろいの爬虫類コスチュームの下で諸構成員が二人で、大きな楕円形の鏡を運んでくる。木製の精緻な装飾に飾られた高級品の鏡だ。
鏡に映された自分の全身を見て、マイティナースは息を呑む。

白いコスチュームをコトしたエイリアンゴールドは、本物よりもはるかに薄く、肌を露出している。そのためいつもはスパッツで隠している尻球のふくらみが、今はきれいに現れた。
「あああ、この大きさはなに？」
生々しくも黄金に輝く勃起肉筒のササスは、マイティナース自身の記憶にない大きさだ。オナニーのときに指で刺激して、最大限に膨張しても、これほど膨へ、太く、屹立したことはなかった。
さらわなののは胸だけではない。視線を下げれば、黄金の腹に形の良いへそが窪んでいる。
さらにその下！金色の恥丘のふくらんだまの中心に、縦に刻まれた肉腫の形状が突き出ている。まるで天才工芸作家が腕をふるった精緻な金細工のときき繊細さだ。幸いにも覆われているのは恥丘の表面だけで、女性器の内側には侵入してはいないと感じられた。
（恥ずかしいっ！素肌は思えていないけど、こんなの、全裸でいるのを要わないっ！）
胴体は金色の塗料によるボディペインティングと同じ状態なのに、頭に載せた白いナースキャップと両足の白いブーツは残されているのが、ミスマッチなセクシーさを醸し出している。
シエントルマン・レックスが鏡を持つ構成員を下がらせて言った。
「有名な映画で、全身に金粉を塗った女のダンサーが皮膚呼吸をできなくて死ぬ場面があるが、あれは嘘なのだ。人間は皮膚呼吸をしていないから、マイティナース嬢も安心してその美しい衣装を楽しみなよ」

その映画をマイティナースは知らなかったが、そもそも種族に目を傾ける余裕などない。突然、手首と足首を拘束する金の鎖が、ひとりでにほどけたのだ。
「あつー」
前置きもなしに身体を解放されて、マイティナースはバランスを崩し、前のめりにカベットを敷いた床に倒れて、四つん這いになってしまっ。尻が持ち上がり、照明の光を浴びて、金色の二の尻たぶがキラキラとまはゆい。
（自由になつた、やな）
四つん這いの姿勢からカベットを蹴って、エシエントルマンに跳びかかった。宇宙金属の亀やテラノサウルス人間よりも、薄せて年寄りっぽい蛇人間なら、今のキアを上げられない自分でもなんとかならそう思う。
両手が、黒い縞に包まれた細い胴体に触れた。なんともいえないヌメヌメした不快な感覚が伝わる。
マイティナースの目の前で黒い蛇の頭が大きく口を開き、喉の奥から黒い煙が噴出した。顔が黒煙に包まれると、一瞬で気が遠くなり、その場にベタンベタンとへたりこんでしまった。

「気がつけよ、マイティナース。われが加減をせねば、我が毒息で汝の顔を泥濘のごとくに溶かさせたのじゃ」
「新人ヒーロー嬢、顔を上げろ。俺を認めて」
頭上からゴールデンシルの大声を流しこまれて、マイティナースの意識が覚醒する。今はまだ抵抗する力がないと悟ると、あわてて床に正座して、右胸で両方の乳房を押さえて、右手を下腹部に出した。
そこにはなにもない。ゴールデンシルのそこは金色のツルンとした金属だけだ。

「あつー」
前置きもなしに身体を解放されて、マイティナースはバランスを崩し、前のめりにカベットを敷いた床に倒れて、四つん這いになってしまっ。尻が持ち上がり、照明の光を浴びて、金色の二の尻たぶがキラキラとまはゆい。
（自由になつた、やな）
四つん這いの姿勢からカベットを蹴って、エシエントルマンに跳びかかった。宇宙金属の亀やテラノサウルス人間よりも、薄せて年寄りっぽい蛇人間なら、今のキアを上げられない自分でもなんとかならそう思う。
両手が、黒い縞に包まれた細い胴体に触れた。なんともいえないヌメヌメした不快な感覚が伝わる。
マイティナースの目の前で黒い蛇の頭が大きく口を開き、喉の奥から黒い煙が噴出した。顔が黒煙に包まれると、一瞬で気が遠くなり、その場にベタンベタンとへたりこんでしまった。

「気がつけよ、マイティナース。われが加減をせねば、我が毒息で汝の顔を泥濘のごとくに溶かさせたのじゃ」
「新人ヒーロー嬢、顔を上げろ。俺を認めて」
頭上からゴールデンシルの大声を流しこまれて、マイティナースの意識が覚醒する。今はまだ抵抗する力がないと悟ると、あわてて床に正座して、右胸で両方の乳房を押さえて、右手を下腹部に出した。
そこにはなにもない。ゴールデンシルのそこは金色のツルンとした金属だけだ。

「あつー」
前置きもなしに身体を解放されて、マイティナースはバランスを崩し、前のめりにカベットを敷いた床に倒れて、四つん這いになってしまっ。尻が持ち上がり、照明の光を浴びて、金色の二の尻たぶがキラキラとまはゆい。
（自由になつた、やな）
四つん這いの姿勢からカベットを蹴って、エシエントルマンに跳びかかった。宇宙金属の亀やテラノサウルス人間よりも、薄せて年寄りっぽい蛇人間なら、今のキアを上げられない自分でもなんとかならそう思う。
両手が、黒い縞に包まれた細い胴体に触れた。なんともいえないヌメヌメした不快な感覚が伝わる。
マイティナースの目の前で黒い蛇の頭が大きく口を開き、喉の奥から黒い煙が噴出した。顔が黒煙に包まれると、一瞬で気が遠くなり、その場にベタンベタンとへたりこんでしまった。

「気がつけよ、マイティナース。われが加減をせねば、我が毒息で汝の顔を泥濘のごとくに溶かさせたのじゃ」
「新人ヒーロー嬢、顔を上げろ。俺を認めて」
頭上からゴールデンシルの大声を流しこまれて、マイティナースの意識が覚醒する。今はまだ抵抗する力がないと悟ると、あわてて床に正座して、右胸で両方の乳房を押さえて、右手を下腹部に出した。
そこにはなにもない。ゴールデンシルのそこは金色のツルンとした金属だけだ。

「あつー」
前置きもなしに身体を解放されて、マイティナースはバランスを崩し、前のめりにカベットを敷いた床に倒れて、四つん這いになってしまっ。尻が持ち上がり、照明の光を浴びて、金色の二の尻たぶがキラキラとまはゆい。
（自由になつた、やな）
四つん這いの姿勢からカベットを蹴って、エシエントルマンに跳びかかった。宇宙金属の亀やテラノサウルス人間よりも、薄せて年寄りっぽい蛇人間なら、今のキアを上げられない自分でもなんとかならそう思う。
両手が、黒い縞に包まれた細い胴体に触れた。なんともいえないヌメヌメした不快な感覚が伝わる。
マイティナースの目の前で黒い蛇の頭が大きく口を開き、喉の奥から黒い煙が噴出した。顔が黒煙に包まれると、一瞬で気が遠くなり、その場にベタンベタンとへたりこんでしまった。

「気がつけよ、マイティナース。われが加減をせねば、我が毒息で汝の顔を泥濘のごとくに溶かさせたのじゃ」
「新人ヒーロー嬢、顔を上げろ。俺を認めて」
頭上からゴールデンシルの大声を流しこまれて、マイティナースの意識が覚醒する。今はまだ抵抗する力がないと悟ると、あわてて床に正座して、右胸で両方の乳房を押さえて、右手を下腹部に出した。
そこにはなにもない。ゴールデンシルのそこは金色のツルンとした金属だけだ。

「あつー」
前置きもなしに身体を解放されて、マイティナースはバランスを崩し、前のめりにカベットを敷いた床に倒れて、四つん這いになってしまっ。尻が持ち上がり、照明の光を浴びて、金色の二の尻たぶがキラキラとまはゆい。
（自由になつた、やな）
四つん這いの姿勢からカベットを蹴って、エシエントルマンに跳びかかった。宇宙金属の亀やテラノサウルス人間よりも、薄せて年寄りっぽい蛇人間なら、今のキアを上げられない自分でもなんとかならそう思う。
両手が、黒い縞に包まれた細い胴体に触れた。なんともいえないヌメヌメした不快な感覚が伝わる。
マイティナースの目の前で黒い蛇の頭が大きく口を開き、喉の奥から黒い煙が噴出した。顔が黒煙に包まれると、一瞬で気が遠くなり、その場にベタンベタンとへたりこんでしまった。

自分が失われるという恐怖が一気に増幅され、マイティナースの脳を深い暗黒に染めた。自分の体内にそそがれている熱い奔流が、量が異常に多い人間の精液だとしても、邪悪な怪物に汚染されたことに変わりない。
「あああああああああ……」
恐怖にがんじがらめたされて、マイティナースは深い闇の中へ墜落していった。



闇の中から影法師が浮上する。

まぶたを腫くと、高い天井が目に入った。

石造りの天井だ。木製のシャンデリアが下がっているが、よく見ると電灯ではなく、多数の蠟燭が立っ塊だ。

はっとしてマイティナスは起き上がり、自分の身体がまだ存在することを確認する。あのままイリマンホールに吸収されること思っていたが、とやむを得ず分かれたようだった。

「生きてる……ああ、生きてる。よかった。生きていられた。」

人生で最大の安堵の息をついてから、あらためて不思議なことに気づいた。

脚体をコーティングしていた金色の偽コスチュームはなくなり、かわりに被られたはずの白いコスチュームを着ている。よく見ると、自分と往々の手作りだったコスチュームより、作りが上達だ。布の肌触りも前より心地よい。

しかも本物より布が薄く、伸縮性が強くて、肌に密着する。さらに本来はコスチュームの中に着ているスポーツブラとスポーツショーツがない。そのため程こまに乳首のささやかな突起や、羞らしいへそのほみがくっきりと浮かんでいて、身体を曲げて尻関節を覗けば、恥丘のふくらみに走る秘面の溝までが、白い布の表面に刻まれている。

「いかがかな。僕が複製させたマイティナス嬢のコスチュームの着心地は、レプティルホルの総力を結集したブレンドだよ。」

至内にシントルマン・レックスの音が響いた。今の姿を見られていると、両手で胸と下腹部を隠す。

「僕たち犯罪者にとってスパーヒーローは真剣に殺してやりたいと願う敵であるけれども、同時に僕は紳士としてスパーヒーローに敬意をいたしている。マイティナス嬢のコスチュームを再現して着せたのも、敬意の表れだと理解してくれたまえ。」

シントルマン・レックスが自慢げに語る言葉は、マイティナスにはさっぱり理解できなかった。無視して見まわすと、先陣する前までいた部屋よりも広い。英国貴族の御屋敷の立派な部屋に比べるべく、対照的な豪華な空間だった。

床も、壁も、天井も、若くてきている、巨大な岩の内部をくりぬいたのが、それとも石材を巧みに組み合わせて、岩盤に見せかけているのが、マイティナスにはわからない。カメラやスピーカーも見当たらないが、シントルマン・レックスの言葉から考えても調整しているのだらう。

岩壁には大きな壁画が描いてある。大蛇の群れた、様々なデザインの大蛇がからみ合い、巻きつき合う。プリミティブな筆致だが、不気味な迫力で気圧される。

そして一方の岩壁からは、平面の絵ではなく、巨大な蛇の石像が突き出ていた。ひとつの太い脚体から九本の脚が伸びている奇怪な大蛇だ。

「ああ、という言葉を自然と頭に浮かぶ。

蛇の神を崇める神教。慈悲や愛といったものはまったく感じさせないが、神秘と荘厳さはひしひしと感じる。この異様な神教は、当然ながらひとりの怪物的犯罪者にびつたりだ。

「あー」

多数の蠟燭の光が作るマイティナスの影が、岩床の上で揺らめいた。直後に影の中から蛇と人間の混合物がスルスルと這い出てくる。

「あああー」

エンシエントポイズンの姿を目にした途端、マイティナスの全身にゴルデマシエルの毒霧が注ぎ込まれた恐怖と苦痛が湧き上がり、自分の影から逃げるように跳び退る。

長い蛇体を床の上でぐにぐに巻いた魔導師が、黄色い眼で怯えるスパーヒーローを追い、しわがれた声を唸然と向けた。

「マイティナスは蛇怪人から離れたエラの壁際まで走り、両手で岩の表面を何度も叩いた。あいかわらずキアを上げることはできず、女子大生の腕力では壁がビクともしない。突も吐けない。壁際に視線をめぐらせ、指先で表面を探しても、出入り口はどこにも見つけられない。

マイティナスのあわてふためく姿を、縦長の蛇の瞳が興味深そうに見つめる。

「マイティナスがスズクが気絶している間に、我が魔術によって記憶を覆した。スズクがスズク捨てて子であったとはな。裏の両親は今もわがらぬまま、捨てた両親は、見えないスリーカーから再びシントルマン・レックスの音が響いた。

「無粋なことはやめたまえ。なにことも解き明かすには足りない研究者であるエンシエントポイズン。君の身分はわかるがね。スパーヒーローとスパーウィランはがりのその名前を盗んで舞ってこそ難だ。正体だの本たのは野暮の極みだよ。」

エンシエントポイズンが反論もなく、話題を変えた。

「ゴルデマシエルのお遊びの後には、マイティナスがスズクにレプティルホルの業務に協力してもらおう。ゴルデマシエルはただの用心棒。猫犬ならぬ猫鼠にスズクがすぎない。レプティルホルはシントルマン・レックスがスズクを出し、我が魔道によって業務を行っている。このように。」

今度はエンシエントポイズンのとくなく影が揺らめいた。

水面の下から顔を出すように、影の中からいくつもの女の顔が浮かび上がった。

「顔の中にいた人たち。」

驚くマイティナスを、女たちの美しくも呆けた表情が見つめているように感じた。無表情なのに、視線には強烈な妖異なものがこめられていて、コスチュームを通して奥にまわりつづいた。

影の中から現れた女たちは、全員で六人。産の中同じく一米まとわぬ全裸で、横一列に並び、エンシエントポイズンに向けてさらさらと顔を揺れる。

「マイティナスがスズクよ、見るがよい。我が魔道の精進にして、レプティルホルが魔の世界に供給する商品で、愛しき蛇の母たちよ、仕度スズクがスズクするのじゃ。」

六人の女たちがきれいなハーモニーで歌った。

「エンシエントポイズン様のお望みのままになることが、わたしたちの心底よりの歎ひです。」

男性器だ。

肉髯の部分は、マイティナースの肌と同じ色白、きれいに剃けている亀頭部分は赤く色づいている。これまで目にしたゴールデンシルの黄金の剛毛と毛、エンシエントボイズンの黒い蛇頭棒とも異なった色は、まともな人間の男性器だと思わせる。女である自分の身体から生えていなければ、もっとまともだろう。

罵いて両手をスリスリ向かって近づけるが、指が触れる前に止まった。触ってよいものが、困惑して動けない。

「どうして、わたしにこんなモノが？」

「マイティナーススススススが他の女に種付けスススススススこと、その女はマイティナースススススススのオビビト能力を持つ蛇の卵を奪むのじゃ。」

「わたしが他の女の女の人に種付けする！ そんな馬鹿なこと。」

「種付けされるのは、この女たちじゃ。」

エンシエントボイズンの影の中から四人の女が出現した。透明な権の中にいた女たちではない。

マイティナースがはじめて会う四人。

だが全員顔を知っている。名前も知っている。彼女たちのチーム名も。

「サンダークラップス！」

空を飛び、強靱な肉体と脚力を誇るフレア。

電気を操るチームリーダーのスターサンダー。
猫の獣人の魔法使いオセロット。

ハイテクアーマーを身にまとったローズパイイス。

あこがれのサンダークラップスの四人は、きちんとヒーローズチームを身につけていた。

フレアとスターサンダーはおなじみのコスチューム、ローズパイイスはエミラルドクリーンのアーマー、オセロットもシヤカーに似た獣人の姿、これもジェントルマン・レックスのこだわりかもしれない。

しかしテレビで見る姿とは決定的に違うことがある。

四人全員が顔に黒い蛇を巻きつけている。生きた本物ではない、材質はわからないが、作り物の数匹の黒い蛇が絡まり合って、王冠に似せた形を成した。ローズパイイスのアーマーの頭部に王冠を載せている姿は、とても奇妙に感じる。

「他の女も舌は簡単に洗脳できたが、さすがはスズメバチスズメバチヒーローじゃ。人形にスズメバチスズメバチするための、蛇の舌の秘儀を使わねばならんよ」

エンシエントボイスンの言葉通り、顔が見えているフレア、スターサンダー、オセロットには表情がない。リモコンで動くおもちゃの人形でも、もっと感情がうかがえるだろう。全身をアーマーで隠したローズパイイスも、いつも変わらないはずのマスクの顔が空虚に感じられた。

「どうしてサンダークラップスがいるの？」

「東京で別の組織と衝突していたレディホルルの構成員が目をつけられて、サンダークラップススズメバチが基地まで来たのを、我々が買にかけて捕らえたのじゃ。おかげで強力なオビート能力の供給源を手に入れた」

エンシエントボイスンの豪傑な言葉を聞いて、マイティナイスは全身が力げ抜けた。その場でストンと岩の床に尻を落とすように、股間をベニスが見られた。

「あこがれのサンダークラップスが勝てなかった相手に、わたしがかろうはずがなかった。やっぱりわたしにはスーパーヒーローは無理だったんだ」

「かつてサンダークラップススズメバチであった我が人形もよ。マイティナイススズメバチに構はけされるのじゃ」

四人のスーパーヒーローの顔が歡喜で明るく輝いた。エンシエントボイスンから命令されることがうれしくてたまらないという表情だ。

「オセロットは強い魔法使いなのに、エンシエントボイスンの魔法に支配されてるなんて。猫よりも蛇のほうがもっと強力な魔法使いと聞こえるの」

サンダークラップスは四人が横一列に並んだまま歩き出し、まるでアクション映画のクライマックスの敵地へ突入する場面さながらに、「へたりこんだままのマイティナイスへ近づいてく」

「マイティナイスは懸命に面をかけるが、四人は反応を示さない。たまたますひとりだけの名前を呼んだ。
フレア！ お勝い、そんな姿を見せないで！」

フレアのコスチュームは、チャリダーを思わせる白と黒のコンビネーション。背中には黒いマントがある。そして腰に盛り上げられた胸には、シンボルマークである黄色い炎が描かれていた。

マイティナイスのお手製のコスチュームの全身が白で、胸に燃える赤十字を描いたのも、フレアをイメージしてのこと。日本中で、そして世界中で活躍する多数のスーパーヒーローのなかでも、フレアが最も好まれた。

そのフレアが邪悪な犯罪者に操られて、自分に近づいてく。
「フレア！ 目を覚まして！」

真っ先にフレアが、目の前に来てひざまずいた。マイティナイスの床に投げ出された脚部の間にフレアが入り、両手を下半身へ伸ばして、
「だあっっっ」

「どうしてにんげんマイティナイスは背後へ逃げようとする。しかしフレアが素早く動き、女から生えた男根の幹を両手で握られた。
「はっっっっ」

「スズン、と快感が生れた。女が一生知ることのない肉棒を触られる喜びが、マイティナイスの身体に響く。反射的に腰が床から跳ね上がり、自分から肉棒をフレアの手すりつけてしまつと、また新たな愉快な火花が飛び散る。
「あひ、ああああ……」

再び硬い床に尻を落としたマイティナイスの顔を、フレアが正面から見つめてきた。ニエースで何度も見た精悍な表情が、見たことのない妖しい笑みを向けてくる。マイティナイスはなんとなく想像していた女ヴァイランの顔つきそのものだ。

「教えてあげる。よく女の快感は男の何倍とかいっほがあるけれど、ベニスにじられる喜びはじつてちよすていっほ」

「再も、ニエースで聞いた事とした力強さではない。エンシエントボイスンの傲慢さだ。わざとらしい嬌むと匂いという旨味をねつたりまぶした音だ。正気のフレアがこんな複雑なことを言っわけないわかってる。頭にかかされた蛇の毒がだげらの仕業だ。」

「脚の指を取れば、サンダークラップスはまともになるかもしれない」

「右手をフレアの腰に伸ばし、絡み合つ作り物の蛇を握らうとする。だが指が触れる前に、舌根から黒い火花のようなものが閃き、手が弾かれた。

直後にフレアの表情が変わつた。淫靡な笑みが差んで、黒き顔になり、そして高周波の振つきになる。
「すまない、マイティナイス。魔法で身体を凍らせている。なぜだか今は自分の意志で話せるが、身体は動かさな」

「エンシエントボイスンの長い首がグニャリと曲がり、蛇の頭が横倒しになった。
「これは興味深い。蛇の舌の支配が、部分的とはいええ勝手に解除されること、かつてない現象じゃ」

「なにかを探っているように舌が口の外へ伸びて、迅速でペロペロと上下した。蛇の舌がさらにじやわって上下反転する。
「ふーむ、マイティナイススズメバチの肉体には、蛇の魔法に対抗する特別ななにかがあるのじゃうが、われが記憶を読んだとまじ、隠し立てしたことがあるのか」

「マイティナイスは無意識に首を左右に振っていた。



サンダークラップス！リボーン
マイティナース

フレアチオをされたときよりもさらに激しく、銃口から結核が噴出して、フレアの体内にあふれかえった。奔流の勢いに押されたように、フレアとマイティナースの身体が床から離れて、空中に浮かび上がる。マイティナースの飛行能力は今も封じられている。フレアが後退を連れて飛んだのだ。宝冠でコントロールしているからこそ、オブリート能力が消されていないのだらう。

「あひっ！ あっおおあうっ！ 出るっ！ もっといっはいっはい、フレアに出してイッちゃぶぶらうっ！！」

「いっっ！ マイティナースの種子をぶったぶらうだっ！ はっああイクッ！ わたしを種子をぶらうてイククラウラウラウラウッ！！」

蛇の岩神殿の天井近くで抱き合い、つながり合った二人の身体がクルクルと回転した。様々な体液が飛び散り、床に降らせた。

「はっっっっっっっっっっ！！！！」

「くおおおおおおおお！！！！」
叫びながら二人の身体が溶解する。マイティナースを抱きしめるとフレアの胸中が岩の床に激突した。衝撃のほとんどはフレアの身体が吸収したが、マイティナースの身体が弾み、ペニスが出っけ、精液と尿液をまき散らす。

「ああああ……」
床に転がったマイティナースの前に、エヌラルトクリンの金属の脚線美が迫った。顔を上げると、蛇の宝冠をかぶった金属のマスクが目に入る。全身を包むアーマーの女らしい曲線を掻く胸で、赤い蕾の花のレリーフが輝いているのが印象的だ。

「……ロスデバイス」
全身を金属の装甲で覆ったロスデバイスは、どうするんだらう？、もじがして、わたしの前でアーマーを脱ぐの？

ロスデバイスは活動するときには、常にアーマーを装着していて、生身の部分を見せたことがない。声も自然な声だが、機械で変えた声だと語っている。アーマーのスレンダーな体形から、中にいるのも魅力的な大人の女性だろうと世間では推測されていた。

見上げるマイティナースの前で、アーマーの股間部分がはずれた。サンダークラップスのチームメイトしか知らないが、ロスデバイスのアーマーは小さいパンツをブロックのように組み合わせられて構成されていて、本人の意志でどの部分でも自由自在に分割して剥ぎ取ることができる。

これもチームメイトだけが知っていることだが、ロスデバイスはアーマー装着時には、身体に特殊な黒いインナースーツを着ている。

だがマイティナースの目に映ったのは、剥き出しの恥丘だった。

光沢のある金属の中から色白の女の羞恥が覗いている光景はアンパランスで、生々しさが強調されている。そしてマイティナースは意外なことに笑っていた。

「なんだか幼げな感じ……ロスデバイスの中の人は、アーマーのイメージよりも若いのかもれない」

じつはロスデバイスかマイティナースと同年代で、特殊な生い立ちのために年齢よりも若い身体つきたとは知る由もない。

「来てください」
ロスデバイスもフレアのまねをするように、馬車のエヌラルトクリンの金属の指で恥蓋を左右に引っ張り、恥丘を楯に割った。

新たな羞恥がアーマーの中に花開いた。胸の蕾の花のレリーフは鮮やかな真紅だが、下半身の羞恥は淡く、みずみずしいピンク。可憐な若い羞恥だ。

「かわいいー」
マイティナースは羞恥な感想を口に出すと同時に、股間の淫蛇に引っばられて羞恥く立ち上がった。自然と両手でアーマーの肩をつかむ。

その途端、ロスデバイスの頭にはまた蛇の宝冠から、黒い電光が四方へ放たれる。

「マイティナース、ごめんねさ」
目の前のマスクから声が出た。予想もしない弱々しい声。

「コントロールから解放されたのです」

「はい。今は言葉だけは、自分の意志で話せます。あなたをこんな酷い目にあわせて、本当にごめんなさい」
 「わたしこそ、もうがまんがなくて、どうにもならないです。許して！」
 両腕でアーマーの硬くめらかな背中を抱きしめて、下半身をロースデバイスの下腹部へ押しつけた。蛇ペニスが入りたりに響き、
 抱い進む姿の中に閉くリンクの響きの中心に亀頭を潜りこませる。
 「あひいっ！ ロースデバイスの中、気持ちいいっ！」
 「あああっん！」
 マイティナイスは卵根を完全にロースデバイスの内側へ埋没させる。器を自分の前のマスクの口に押しつけた。すべすべしているが
 硬い感触が伝わる。器根を完全に隠した仮面にキスをして、なんの意味があるのか、自力でもわからない。ただ淫らな蛇に誘らされて
 キスしないではいられない。
 密着するマスクの向こうから、明瞭な声が響きわたる。
 「この姿でキスなんて、はじめてです！ あっ、あふっ、すっ、すごい！ おまこがすごいですう！」
 フレアと違って口調が変わらないので、今のロースデバイスが装置に接続されているか、いないか、判断しない。

立ったまま器を振り回すマイティナイスの白いブーツと、ロースデバイスの緑の脚部装甲が床を蹴れた。マイティナイスには指輪も
 つかないハイテク装置によって、二人の身体が空中に浮かぶ。飛行能力を封じられたマイティナイスはすり落ちないように、両腕両脚
 をコアラのようにアーマーに絡ませてしがみつき、腰をくねらせた。
 一度の射撃で、マイティナイスの中に蛇男根と脳の快感中枢を結ぶ回路が完成していた。亀頭から送られてくる強烈な快感に酔い痴
 れる脳が、早くも三度目の精液放出の命令を下した。
 「ああああ、また出るっ！ ロースデバイスの中にまた射撃しちゃおうっ！ わたしのじゃないのにオチンチンがイクっ！！ ひ
 いひいひい、出してっ！ イクっ！ イくっ！！」
 自身の精液にじこかれて、尿道がビリビリと焼けつく。ひとまわり速くロースデバイスの腰突を突き上げ、二人の身体はさらに空中高
 く舞い上がった。

ロースデバイスのアーマーの表面からホタルのような光が放たれ、四方八方へ飛散すると、ババババババッと小さな爆発を起こし
 た。なにかの装置が勝手に作動したようだ。
 「イクっ！ マイティナイスの子種をもらって、イキますっ！ イくっ！！」
 「あああああ……」
 「あふっ！……」

二人そつて背後に尻餅をついた。壁から抜けた亀頭が、尿道に残っていた精液を搾り出し、アーマーのエクサルドグリンの胸と
 壁にふりかける。真紅の器根のレリーフが、白い霧でまたらに塗られた。
 「わたくしにもマイティナイスの子種を授けてくださいませ」
 「ボクも子種が欲しいニヤン」
 背後から二つの嬌声が聞こえた。

ふりかえるら、スターサンダーが床に仰向けに横たわり、両脚をM字の形に開いている。チームリーダーの身体の上に、オセロット
 がうつぶせで重なり、尻を這けている。
 スターサンダーはサンダークラッシュの最年長で、二十代後半。電気を自在に操るオフェイト能力を持つ。
 チームで最も大きな乳房をはじめとして、女らしい豊満な肉体を、赤地に青い稲妻が走るレオタード状のコスチュームで飾ってい
 る。

コスチュームの中央には、稲妻型の透明な部分がある。その下までつづいた、おかげで巨乳の半分があらわになる。太腿も全開で、女性
 ヒーローセクシーランキングの上位の常連。
 これだけ肌を露出しては、赤いアイマスクで両目の周囲だけは隠した。
 今日はいつものより大きな露出が多い。開いた両脚の中心でコスチュームに穴が開き、恥丘と肛門をさらけ出した。すでに肉の亀裂
 は大きく開いて、高く勃起するクリトリスとぶらぶらした肉裂、そしてヒクヒクと動く膣口を、自身が生じた精液でべったりと濡らし
 ている。

オセロットはジャカカを思わせる獣人、南米の様々な動物種物の精霊を召喚する魔法使い。
 ヒーローネームのオセロットそのものが、中南米に棲息する猫科の動物の益前で、ジャカカを小さくしたような姿だ。
 オセロットも全身を、黄色に黒い豹紋を散らした獣毛に被われている。尻からは長いしっぽが生えていて、今も尻尾を揺られてマ
 イティナイスを誘惑した。

全身を長い体毛で被っているオセロットの姿は、はたしてコスチュームなのか、それとを全裸なのか、という議論がヒーローファン
 の間でずっと継続している。いくらなんでもスーパーヒーローが人前に全裸で現れるはずがない、という意見が主だ。
 しかし今のマイティナイスには、自分の目の前にオセロットが向けているものは、裸の尻としか思えない。
 「あ、ボクのエッチな尻にオセロットの尻を触らせてあげようニヤン」
 「オセロットが尻尾を揺らして」
 ニューズで見るオセロットは尻尾をさくさく揺らけれ、ニヤンニヤンなどニヤキキミたいなことは言わない。

これが蛇の器根に支配されている結果だとしたら、想像を絶する恐ろしい効果だ。あらかじめエンシメントホイイスの魔力に感傷し
 ながら、ふらふら二人は近づいていく。女性スーパーヒーローが重なり合っている股間と尻を見せつけている。この世のこととは思えな
 い光景だ。
 誘われるままに両手をオセロットの尻に置いた。指が柔らかい体毛に沈む。

オセロットの尻尾から黒い電撃が放たれる。しっぽがピンとまっすぐに直立して、背中の獣毛がソワソワと揺れ出した。
 「ジャカカアア、なにこれ！」
 オセロットが尻尾を背後に向けて、猫っぽいやつを表現した。見開いた眼でマイティナイスを凝視する。
 「すごいよ！ それ、いったいなんの力？」
 「えっ、なんの力が、わからない。わたしの力があるんですけど」
 そんなことどうでもいいから、早くオマオコに種付けしてニヤン

オセロットから驚嘆の色が消えて、また卑猥な笑いをこぼして、こうなるまで化け猫じみた顔だ。

サンダー クラッシュ スーパーヒーロー マイティナイス

「マイティナースがスーパーヒーローを辞めたいと知りながら、二人を脱出した後で諦めればよい。自分の人生を選択するのは自分だけだ。でも今は諦観するな。自分が他人に食いつかれる生活方を遠くではだめだ！」
力強い言葉が発した直後に、フレアが表情が支配された。瞳が欲望にきらつき、口は薄紅な笑みで歪む。急激な変容を見せつけられて、マイティナースの視線はフレアの言葉に反してより深くなる。
「今度はわたしの二本の肉の武器で、新人を賣いでやる。」

「あんっ！」
両肩を押されて、上体を押し倒された。衝撃で大きく開いた太腿の中心に、うねる蛇頭根とそりがえる本来の肉棒が押しつけられる。膣口と肛門が同時に硬い亀頭でなされる。一瞬所から快感の火花がパチパチと鳴った。
「あひいっ！」
火花に焼かれるマイティナースの背筋が、床の上で震える。

フレアの両手がマイティナースの腰をこきみ、腰を突き入れた。無慈悲に膣口が押しつけられ、容赦なく亀頭が侵入してくる。快感の火花が大きな炎と化して体内をメラメラと揺めていく。
「あひいっ！」
同時に乱舞に肛門がこじ開けられ、鋭いた亀頭に腫えくられる。エンシントポイスンに刻みこまれた尻の快樂の回路に電流が走り、フルパワーで歡喜の生産を開始した。
「ひおおおっ！」
腰と尻から噴き上がる歡心の波に呑みこまれ、押し流されて、マイティナースの意識が弱々しくまたいた。

「わたしが終わる。」
すべてをあきらめ、自分が自分であることすら捨てるのは、大いなる恐怖でありながら、同時に不思議な悦びになった。自分の意志がなくなり、自分の自由を失い、すべてを他者に委ねることこそ、真の平和と安楽ではないかと思ってしまう。
「フレア！ あああ！ フレア……」
マイティナースは自分から、自分を拒すフレアにしがみついた。そうすればもっと早く自分を消せる気がする。

「あきらめるな、マイティナース！ 絶対に自分を捨てるな！」
「あきらめるな、マイティナース！ 絶対に自分を捨てるな！」
目の前のフレアの顔が、またもや正常なスーパーヒーローになっていた。
「必ずわたしが、みんな。」
なおも勇氣を与えようとする口を、マイティナースが唇でふさいだ。驚愕するフレアの舌を強く吸い、自分の舌をねっとり絡ませる。

「んふ、んんむ、くふあああ……」
「うっ、んんん、マイティナース、やめ、うっ……」
フレアの顔は変わらなかった。困惑するスーパーヒーローの顔。追いつめられて自暴自棄になっている後編ヒーローへの同情。自分がどうにかしなくてはならないという焦り。最悪の状況をお話立てして、それを冷静に観察している悪党への怒り。スーパーヒーローらしい嫌な嫌いを顔に出しながら、マイティナースを拒す下半身の動きはますます激烈になっていく。

二本の剛面に貫かれるマイティナースは、フレアの舌の表情が腫に映っても、もはや認識の外だった。意識されるのは、自我の快感を与えくれる二本の肉の杖のみ。
エンシントポイスンが得々と語った男根が魔法の杖だという言葉の意味が、今こそ本意に理解できた。フレアの二本の男根で貫かれて、猛烈な快感とともに、自分の身体が学校の化学実験の薬品のように、バラバラに壊滅されていると感じた。体内の内臓も、骨も、筋肉も、ドロドロに溶けて、グルグルと巻き回られて、融合して、新たな物質になろうとしている。

「はんんむ、うううあああ、終わる、終わる、わたしは終わる、別のものになる……かっあああああ……」
「貴女が鏡の中で一度液体になり、再び凝固して、似ても似つかない別の身体になるように、自分の身体が別のものに削り替えられていく。」
「気持ちいい！ ああああ、気持ちいい！ みんな終わって、削り替えられるのが気持ちいいよ！」
蛇の母にされた女たちが、どうして親子宮にこのか脚体の中にも入りまらぬ卵を産めたのか、今ははっきりとわかる。肉体を改造されたのだ。腹の中に別の空間を造られている。

オフビートの能力のエキスから卵を作る真空空間。それが女たちの、そして今は自分の腹の中に建造される。子蛇が創造され、卵の殻に包まれて、やがて腹を通して外の世界へ生まれるのだ。
「わたしは、ああああ、わたしは、卵を産む機械にされる。はっううう、ああああ、蛇をたくさん産卵する、あひい、生きてた機械になるのっ！」
「だめだ、マイティナース、あああああ……」
フレアが長々と絶叫して、ひときり激しく、深く、二本の男根が突き入れられた。腰と膣の隙でひたひたになった魔法の空間で、同時に二つの亀頭が大噴火する。女の体内の真空空間へと、膨大な液体がまき散らされた。

「イクっ……」
マイティナースはひと言だけしか、エクスタシーの声を叫ばない。未知の衝撃が喉をつまらせず、言葉も呼吸も奪われた。背中から床に倒れ、ハイパワー機が作動したスマートフォンのようにカクカクと運轉する。
外からは苦しんでいると見えるが、マイティナースはめくるめくる絶頂の大笑の中をたまたたいてた。たうつ女体の中で、飛散する精子が自分を形作る何かと融合して、新たなものに結実するのを感じる。

「産むのじゃー、マイティナース、産むのじゃー、産むのじゃー」
常に冷徹な態度を示していた魔道師が、がまんできないようにうすうすとした叫びを放つのが聞こえた。
マイティナースはヒュー……と大きく喉を鳴らして空気を呑み、無意識に手足に力をこめた。自然と身体が床から持ち上がり、全裸の女たちやサンダークラップスが見せつけたM字陣地の産卵ポーズになった。

「はっううう……」
今日処女を失ったばかりだが、セックスとはまったく異なるのはじめての感覚が湧き起こり、持ち上げた股間が激しく上下に揺る。腰の奥に、突然異物が出現した。つまりまっすぐ作られた体内の真空空間から、腰の奥の部分に卵が移送されたのだ。外から奥へ向かって様々な男根を挿入されるだけだった腰の中を、球形のものが奥から膣口へ向かって進んでいく。

しかし構成たちは生きている。手に持っていたサブマシンガンは焼失したのに、おそろいの制服は焦けてすらいらない。ただ全員が意識を失って折り重なって倒れていた。

とも焼けていない。激怒していても、人を傷つけたくないという思いが、ドラゴンの魔力の炎に燃やすものを差別させた。人間には精神に魔力で衝撃を与えて、気絶させるだけにした。もし殺意があったなら、全員がひとかけらの骨も残さずに蒸発していただろう。

「はああああ……」

炎ではなく長い長い息を、ドラゴンが吐いた。直後に巨体が赤い炎に変わり、小さく収束していく。

炎が再び物質化する。マイティナースが床に座りこみ、もう一度大きな息をついた。

「わたしは人間じゃなかった。全然知らなかったドラゴンのいろいろな知識が、頭の中にどんどんあふれてきてゴチャゴチャ。ドラゴンなんて、どうしたらいいの？ これから、なにをすればいいの？」

「はああああ……」

顔を上げる。命令書がいなくなつて古びつめたままのサンダークラブスの四人の頭で蛇の首冠が燃えつきた灰になつて粉々に砕けた。

四人の顔に本来の表情がもどり、マイティナースへ向かつて駆け寄つてくる。

「そつだ。少なくとも、わたしにはするこたがある。」

マイティナースは無理に微笑んで立ち上がり、これからスパーヒーローがするべきことを四人より先に言った。

「監禁されている人たちを解放しましょう。」

マイティナースは突然二階堂正敏と二階堂麗美の科学者夫婦を抱えて、空を飛んだ。
二階堂麗美の母親は、レプティルホルの基地の庭に監禁されていた。蛇を産卵する女たちとは違い、夫婦が閉じこめられていたのはホテルの客室で通用する部屋だった。

マイティナースとサンタークラップスはエンシントポイスンの魔法の支配から解放されると、基地の中を捜索して、構成員たちを捕縛し、大勢の女性を解放した。

サンタークラップスが勝手に通報し、女性たちが受けた邪悪な魔法による障害の検査のために、ジャスティスサーカスに連絡した。日本最高のヒーローチームであるジャスティスサーカス本部には、魔法治療の専門設備がある。

構成員の誰も存在を知らなかったが、シエントルマン・レックス専用の緊急脱出システムが作動した痕跡があった。さんざんホワイト屋の組織と書っておきながら、基地を捨て、部下を捨て、ひとりでも逃がしたのだ。

マイティナースは自分が事件に関わっているとは思わないでほしい、とサンタークラップスに頼んだ。犯罪者やスーパーウィッチと闘うスーパーヒーローだと人々に思われたくなかった。そんな覚悟はまだできていない。

基地の中で、マイティナースとフレアとスターサターのコスチュームの複製を発見した。おかげで脱出丸出しの格好でうろつかなくてすんだ。ロスデバイスだけは自分とアーマールの脱出をたやすく修復した。

マイティナースは、フレアたちに事情を話し、「二階堂夫妻を連れ出した。スマホで降史に連絡すると、両親をある地点に連れてきてほしいと言われた。そこは別れ際に決めた市内の格安ホテルではなかった。

(住衣に、降史をホテルに連れていき、身を潜めているように約束したはずなのに、うしろこん検察所にいるんだろ?)
マイティナースと二階堂夫妻が降りたのは、レプティルホルの基地がある山岳地帯の山々のひびきにホッソとある別荘。

交際の前で、降史と住衣が並んで、ゆっくりと膝下してくる二人に向かって手を振っている。
自分を見守る降史の顔を見ると、胸がキュンとした。レプティルホルの悪党たちが受けた異常で非道きまわりない陵辱も、すべて遠いところへ消えてしまっただけだ。

(そうか、そうだったんだ)。
レスキューに奪還して、犯罪者の相手をしなさい、という自分たちが決めたルールをあっさりと破った理由が、今納得できた。

(わたし、降史さんにひと目で恋に落ちたんだ)。
今までオビエトであることを隠していたために、恋愛に慎重だった。ラブストーリーでよくある誰かをひと目見て好きになることなんて、信じられなかった。それが、今、自分自身に起きている！降史の顔を見れば、自分自身に恋している、とほっきりと自覚する。

(でも、わたしがドラコだと知ったら、降史さんはなんと言ったろう。どうやってドラコだと告白すればいい？でも降史さんなら、きつと受け入れてくれるはず)。
マイティナースは大きな希望を抱いて、降史の前に両親を下した。

感動の再会！熱いハグ！家族の涙！
と、マイティナースは期待した。だが降史が口にしたのは、
「二人とも無事でよかった」
父親は冷静すぎる態度で言えた。

「助かったよ。礼を言え」
母親は無言とくに反応はない。

(ええっ！科挙者一家だから冷静なのかな?)
住衣も麗美の顔で、「二階堂一家を見つめている。だがマイティナースは見送さなかった。親友の種に輝く光を、

(住衣も、降史さんに恋してる。友達がライバルになっちゃう。ああ、どうしよう。きつと住衣のほうが恋愛の経験豊富だから、駆け引きで負けちゃうかも！でも負けたくない！)
【朝田弘樹】

頭上から知らない人の名前を呼ぶ大音が降ってきました。
その途端、降史の顔が変化した。

顔の造形が変わったわけではない。髪型も、目も、鼻も、口も、なにが変わっていないのに、一瞬前まで胸いっぱい感じていた優めきもドキもなくなつた。ごくごく平凡な、言葉で指摘できるような特徴のない、大学の教室や校庭ですれ違つた縁の学生と変わらない存在になった。まるで知らないように目の前にあった十センチメートルが取り払われたように。

「なんですか」
マイティナースだけでなく、住衣も同じ口調で声を上げる。

降史本人は怒りで顔を赤く染めて、空を仰いだ。
空からフレアとロスデバイスが降りくる。エマラルドクリーンのアーマールの腕から五百円玉サイズの小さなディスクが射出され、二階堂一家三人の肩に当たった。ディスクから細いテープが何本も飛び出し、「二階堂親子の全身を縛り上げて動けなくした」。

マイティナースの前に横たったフレアが語る。
「マイティナース、黙っててすまない。二階堂夫妻と名乗っている二人は、ヨーロッパの犯罪組織「秘密の同盟」に所属する科学者だ。ロスデバイスの遺伝子システムが反応してわかった。だから二階堂親子をどうも男も女もなかがあると思って、このネリと捕縛してきた」

「お、それはいいけど、降史さんはいつから」
「じいじの本名は朝田弘樹、職業はヒーローの隣で『空つむぎの王子』と呼ばれている」

「違う！俺のスーパーヒーローネームは『魅惑の王子』だろ」
身動きがとれないエンパイアプリンセスの足音が、フレアは黙殺した。

「じいじは初面の女性に、自分に恋をさせて、言いなりにさせるオビエト犯罪者なんだ。一種のテレビヒーローによるマインドコントロールだ。女性が幼児で、老人で、同性愛者でも好きにやられる。でもじいじの精神的な理由らしいが、恋をしている女性の前で胸

田弘樹と本を呼ばれる。能力の影響を失っ、それでマイティナースも友人も解放されたんだ」

フレアは、エンティフィンスの胸もとをつかみ、厳しく怒鳴った。

「これはどういう計画だ」

「俺はシークレットカバルに雇われただけだ。日本に帰帰した組織の科学者が、シエントルマン・レックスに捕まったから、助け出してこれた」

「よし。後はいつしよに東京へ行って働いてやる」

「待って」

マイティナースが金切りの声をほこほしらせる。

「全部嘘なの！ わたしがしたことは全部嘘で、全部心を壊されていただけ！」

フレアがエンティフィンスを地面に放り出し、マイティナースの面影をつかんだ。

「違う！ 理由は嘘でも、マイティナースがいなければ、レプティルホールに監禁されていた女性たちは救助できなかった。サンダークラブも放獄のままだった」

ロースデハイスも優しく語りかける。

「つらい経験だったと思います。でもマイティナースは」

マイティナースの背中から腫瘍が広がった。フレアの手を振りほどき、ロケットのように青空へと垂直に飛翔する。

空中高く、紅蓮の炎が大きく広がり、真紅のドラゴンが現出した。

赤く輝く翼を大きく羽ばたき、ドラゴンはさらに高層へと上昇して、すぐにフレアの間を照らす視力でも、ロースデハイスのアーマーのレーザーでも、追えなくなった。

このとき始めて親友がドラゴンだと知った佐衣は、ただ青空へ向かって叫んだ。

「泣奈！ 帰ってきて！」

流奈が事故の状況を聞き終えたときには、佳衣がクローゼットから新しいマイティナースのマスクとケースに入った「スチューム」を出していた。「救助が終わったら、新鮮野菜でマイティナースの再始動記念パーティーね」「知らないものは、後でじっくり調べよう」流奈はマイティナースの姿になると、背中から腫瘍の翼をひらき、人目がないのを確認して、マンションの窓からまた明るい夕日の空へと飛翔した。佳衣もザックを背負い、愛車のバイクでマンションの駐車場を出て、親友の後を追って走った。